

田深川豊の国ふれあい川づくり事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

安 国 寺 遺 跡

2001

大分県教育委員会

田深川豊の国ふれあい川づくり事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

安 国 寺 遺 跡

2001

大 分 県 教 育 委 員 会

序 文

国東半島の一角に位置し、戦後間もなく発掘調査が行われた安国寺遺跡は、全国的にも著名な弥生時代遺跡として、「西の登呂」とも称されています。現在、遺跡は国指定史跡となっており、史跡公園として整備が進められています。

今回、県の田深川豊の国ふれあい川づくり事業に伴い、発掘調査を史跡指定地の隣接地において実施いたしました。その結果、多くの遺物とともに溝や土壇、壺棺などの遺構が確認され、安国寺集落遺跡を理解するうえで貴重な資料を得ることができました。

本書が多くの方々に活用され、文化財の保護・啓発並びに弥生時代研究に役立てていただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたりご協力していただいた多くの方々に衷心より感謝申し上げます。

平成13年3月30日

大分県教育委員会教育長
田 中 恒 治

例 言

1. 本書は、平成11年度に実施された東国東郡国東町大字安国寺所在の安国寺遺跡発掘調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、田深川豊の国ふれあい川づくり事業に伴い、国東土木事務所の依頼により大分県教育委員会が実施したものである。また、平成12年度には発掘調査報告書作成にむけての整理作業を行った。
3. 調査の実施にあたり、国東町教育委員会の全面的な協力を得た。
4. 遺構の実測及び写真撮影は、後藤一重が行った。
5. 遺物実測及びトレースは、後藤一重、東保春奈、平野真由美ほかが行った。
6. 本遺跡出土遺物ならびに遺構・遺物の実測図は、大分県教育庁文化課文化財資料室に保管している。
7. 本書の執筆・編集は、後藤一重が行った。

目 次

| | |
|------------------|----|
| 第1章 はじめに | 1 |
| 1 調査にいたる経過 | 1 |
| 2 調査団の構成 | 1 |
| 第2章 歴史的環境 | 2 |
| 第3章 調査の概要 | 4 |
| 1 土壌 | 6 |
| (1) 土壌1 | 6 |
| (2) 土壌2 | 8 |
| 2 溝 | 16 |
| (1) 溝1、2 | 16 |
| 3 壙棺 | 26 |
| 4 その他の出土遺物 | 28 |
| (1) 上器 | 28 |
| (2) 石器 | 36 |
| 第4章 まとめ | 38 |

第1章 はじめに

1 調査にいたる経過

安国寺遺跡は大分県東国東郡国東町大字安国寺字前田に所在する。

遺跡は田深川右岸に位置し、現在は全面的に水田となっている。本遺跡の発見は、大正15年から昭和2年にかけて実施された耕地整理事業によってである。その後、大分県教育委員会と九州総合文化研究所の合同調査が、昭和25年から27年にかけて数次にわたって実施された。調査は、鏡山猛、賀川光夫両氏を中心に、当時の九州の研究者がほとんど参加した九州考古学界の総力をあけてのものとなった。調査の結果、大量の土器や木製品が出土するとともに、大溝と称される底湿地に囲まれた弥生時代農耕集落の状況が明らかになった。これらの成果から、「西の登呂」として全国的な話題となった。以上の調査の全容は、鏡山猛、賀川光夫両氏らにより『大分県国東町安国寺弥生式遺跡の調査』という大部の報告書にまとめられ、昭和33年に刊行された。その内容は、当時調査にかかわった諸氏の情熱があふれんばかりのもので、現在なお弥生時代研究の基本資料となっている。また、賀川光夫氏は、安国寺遺跡出土土器を「安国寺式土器」として提起した。その後「安国寺式土器」は時期の細分などの研究が重ねられられたが、今なお東九州弥生時代後期の標識土器型式名として使用されている。

昭和30年代以降、遺跡はしばらく忘れられた状態が続き、水田のなかに安国寺遺跡の標柱が立つのみであった。しかし、昭和50年代から国指定史跡に向けての機運が高まるとともに、全町的に実施されていた会場整備事業に備え調査が行われた。調査は昭和60年から62年にかけて行われ、弥生時代の良好な建築部材が出土するなどの成果を得た。その後、平成2年に国史跡の指定がなされた。

今回の調査は、田深川豊の国ふれあい川づくり事業に伴い実施された。田深川豊の国ふれあい川づくり事業は、安国寺遺跡の国史跡指定地に隣接する田深川の河川改修工事である。工事は安国寺遺跡の隣接地ということで、史跡公園と一体となる親水施設として整備されることとなった。これについては、県国東土木事務所、国東町教育委員会、県文化課の協議のもとにすすまれ、工事の実施が決定した平成11年夏に県文化課が国東土木事務所の依頼により試掘調査を実施した。その結果、多くの土器を伴う溝などの遺構が確認された。国指定史跡の隣接地であることから、出土遺構の取り扱いについて協議を行ったが、親水施設の整備は史跡公園に欠かせないとのことから、田深川豊の国ふれあい川づくり事業は当初の計画通り実施されることとなった。そのため、遺構の確認された部分の本調査を実施することとした。

本調査は、平成11年11月29日から平成11年12月20日までの間に、国東町教育委員会の全面的な協力のもとに行われた。

2 調査団の構成（役職名は調査時のもの）

| | | |
|------|-----------------------|------------|
| 調査主体 | 大分県教育委員会 | |
| 調査指導 | 別府大学名誉教授 | 賀川光夫 |
| 調査総括 | 大分県教育委員会教育長 | 田中恒治 |
| | 大分県教育庁文化課課長 | 山本芳直 |
| | 同 参事兼課長補佐 | 田原基之 |
| | 同 課長補佐 兼 埋蔵文化財第二係長 | 清水宗昭 |
| | 同 主幹 | 坂本嘉弘 |
| 調査員 | 同 副主幹 | 宮内克巳 |
| | 同 主査 | 後藤一重（調査担当） |
| | 同 主任 | 井川泰成 |

第2章 歴史的環境

安国寺遺跡の所在する国東町は、国東半島東側に位置する。国東半島は、中央に位置する標高721mの両子山を中心に、放射状に細長く谷がのびる。各谷はいずれも狭小な谷底平野がにつき、海岸近くにはいたる程度まとまった沖積平野が形成される。半島各地には「六郷満山文化」と称される仏教文化が古くから華開いており、現在でも各谷々で寺院や寺跡、お堂、各種石造品を多数見ることが出来る。

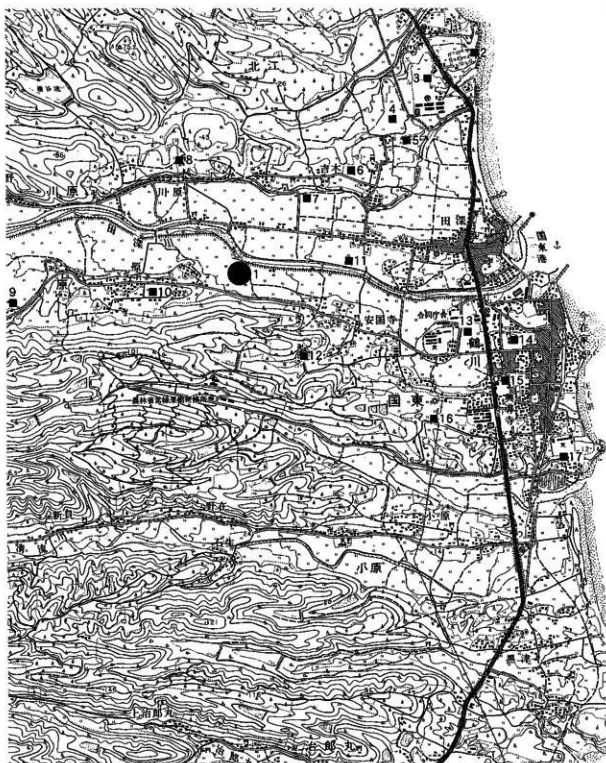
国東町では、縄文時代から中世にいたる多くの遺跡が確認されている。しかし、旧石器時代の遺跡に関しては、現在までのところ確認されていない。国東半島全体を通じてこの段階の遺跡は非常に少なく、今後の調査に期したい。縄文時代では、成仏岩陰遺跡、原遺跡七郎丸1地区、羽田遺跡、ワラミノ遺跡、鬮弓遺跡、森本遺跡などが知られている。早期を中心とした成仏岩陰遺跡では、草創期にさかのぼる可能性をもつ土器が層位的に出土しており、縄文時代開始期の土器を研究するうえには欠くことのできない遺跡である。また、原遺跡七郎丸1地区では、早期に属する注口土器が出土している。前期の羽田遺跡では多くの姫島産黒曜石原石が出土し、石材供給や物資移動の問題についての好資料となっている。後期では、いくつかの遺跡で土器の出土が確認されているが、ワラミノ遺跡では鉢崎式から北久根山式を中心とした土器が出土している。また、鬮弓遺跡からは後期末から晩期初めにかけての資料がまとまってみられる。晩期末では、森本遺跡で刻目突帯文土器などの好資料が出土している。

弥生時代では安国寺遺跡周辺のほかに千疋遺跡、原遺跡、吉木遺跡、畑中遺跡などがある。国東町では、弥生時代の中期段階までは概して沖積平野を見下ろす丘陵上に遺跡が形成されることが多く、本格的に沖積平野に進出してくるのは後期段階に入ってからである。これは、沖積平野の形成がこの段階にいたり安定するものと考えられる。安国寺遺跡の周辺の田深川右岸は、後期以降遺跡が集中する傾向にあり、安国寺遺跡出土の多量の土器とあわせ、この地区が国東地域の中枢を担っていたものと推定される。

古墳時代に入ると、前半期段階のものとして孤塚古墳、番所ヶ鼻古墳群、桜八幡境内古墳などがみられる。孤塚古墳は大型円墳で、主体部は竪穴式石室を思わせる長大な石棺である。また、番所ヶ鼻古墳群には前方後円墳が含まれる。これらの古墳はいずれも田深川下流域の周辺に築造されており、弥生時代以来、田深川下流域が国東地域のなかでも強いリーダーシップをとっていたことが推察される。しかし、これら古墳の立地をみると、いずれも海を意識した場所にあり、これら首長が海部の性格をも強くもったものであることが分かる。後半期になると、浜横穴墓群、寺山古墳、鶴川横穴墓群、黒津崎古墳群など各谷々に横穴墓ないしは横穴式石室をもつものが現れてくる。

古代の国東町には、国崎郡の郡衙が置かれたものと考えられている。郡衙遺構そのものは確認されていないが、田深川下流域がその推定地となっている。近年調査された飯塚遺跡からは、掘立柱建物跡などとともに多量の木簡が出土し、郡衙の関連遺構であろうと考えられている。このほか、瓦が出土する遺跡として、桜本宮遺跡、桜八幡遺跡などがある。また、生産遺跡としては浜崎寺山遺跡が目される。浜崎寺山遺跡からは長大な窯体に8から10の横口が付く木炭窯が検出されている。これらは、製鉄と深く係わる木炭を生産したもので、中央との関連を深く考えさせるものである。国東半島の海岸では砂鉄を豊富に採集することができるが、この砂鉄を原料とした鉄生産を中央と直結したかたちで行っていたことが推測される。

荘園制以降になると、国東半島各地は宇佐佐宮領や宇佐宮弥勒寺領の荘園となる。しかし、国崎郡のみは国衙領として存続する。中世の遺跡は、秋国遺跡、外国遺跡、六田遺跡、前田遺跡、原遺跡七郎丸1地区、畑中遺跡などで確認されている。なかでも原遺跡七郎丸1地区は、集落と水田用水路が確認されており、集落の形成と水田開発の関係を考えるうえに興味深い遺跡となっている。このほか製鉄関連遺跡として、ワラミノ遺跡、原IV遺跡、由井ヶ迫遺跡などが確認されており、中世においても砂鉄を原料とした鉄生産が盛んに行われていたことが分かる。また、大隅遺跡、安近遺跡、浜崎寺山遺跡、ワラミノ遺跡などで木炭窯が検出されている。窯の形態にいくつかのバリエーションが認められ、一定地域における古代以来の木炭窯変遷がみてとれる。



- | | | |
|-----------|------------|-----------|
| 1 安国寺遺跡 | 7 前田遺跡 | 13 飯塚遺跡 |
| 2 番所ヶ鼻古墳群 | 8 板本高遺跡 | 14 桜八幡遺跡 |
| 3 大石久保遺跡 | 9 原遺跡七郎丸地区 | 15 興尊寺跡 |
| 4 外園遺跡 | 10 畑中遺跡 | 16 高木遺跡 |
| 5 秋園遺跡 | 11 六田遺跡 | 17 鶴川横穴墓群 |
| 6 吉木遺跡 | 12 安国寺 | |

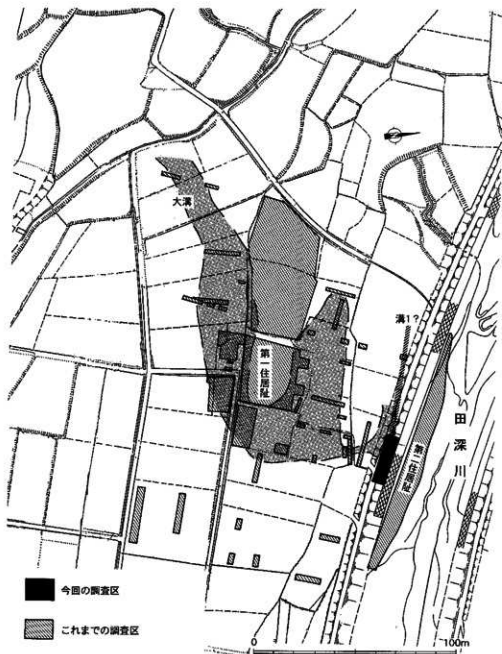
第1図 安国寺遺跡と周辺の遺跡

第3章 調査の概要

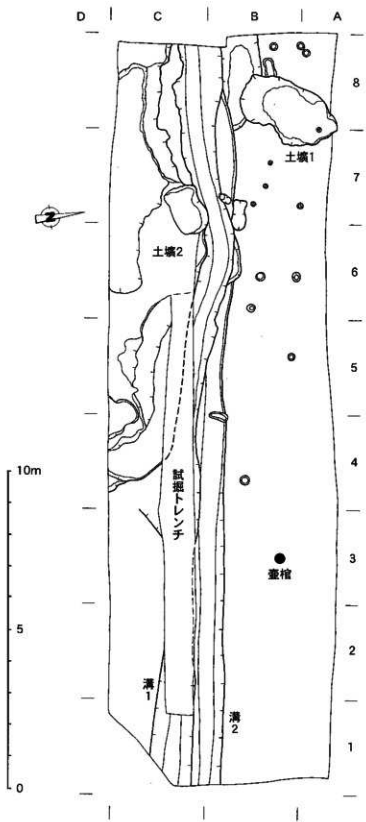
安国寺遺跡は田深川右岸に展開する。標高は現在10m程で、全面的に水田化されている。これまでの調査で、大溝と称される底湿地に囲まれた集落部分や多くの遺物が確認されている。特に、底湿地部分からは多くの木製品が出土している。そのなかには、大量の建築部材や様々な農具などがみられる。

今回設定された調査区（第2図）は、田深川の堤防上にあたる。昭和25年から27年にかけての調査時に、田深川の河川敷部分まで調査区が設けられ、溝などの遺構が確認されている。その後、堤防が整備され現在に至っている。遺跡で確認された遺構のうち大溝については、その後の調査も含め、その展開状況確認のため多くの調査区が設けられ、現在では大方の状況が確かめられている。それによれば、U字状に集落部分を囲む大溝の北側方向は、幅を狭めて続くことが確認されており、そのまま田深川に至るものと推定されている。今回の調査区は、この大溝が田深川方面に続く位置にあたることから、大溝の延長部分が確認されるものと思われていた。

今回の調査区は、約160㎡ほどの小面積であったが、多くの遺物とともに溝、土壌などの遺構を確認した（第3図）。特に、土器を中心とする出土遺物の量は、調査区の面積に比しきわめて膨大で、改めて安国寺遺跡の重要性を考えさせられるものであった。以下、調査の概要を述べる。



第2図 安国寺遺跡調査区位置図



第3図 安国寺遺跡 遺構配置図

1 土壌

(1) 土壌1

土壌1 (第4図) は、調査区の北西隅に位置する。南北方向に長軸をもつもので、平面形態は楕円形基調を呈するもののやや不定形気味である。規模は長さ3.25m、幅1.45~1.80m、深さ0.4mである。壁の立ち上がりは、南側が緩やかで、北側が急である。床面は全体的には平坦であるが、細かな凹凸が目立つ。出土遺物の大半は流れ込みの状態で出土したが、頸部を打ち欠き、胴部に焼成後穿孔を施した小型壺(第5図1)が床面より出土した。

出土土器(第5図)は、壺、甕、高坏、器台、脚付き鉢などがある。

1は小型壺である。球状の胴部を呈し、胴部径は15.5cmを測る。胴部外面上半部は、縦方向のハケメ後ヘラミガキが施される。内面は上半がナデにより平滑にされ、下半にはユビナデの痕跡が残る。

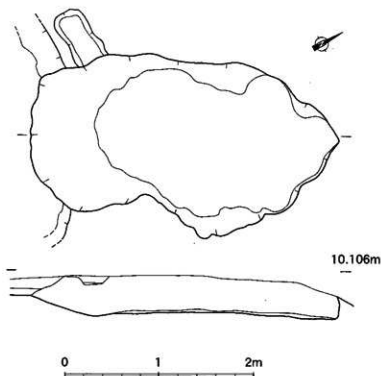
2から4は甕である。2は最大径が口縁にあるもので、口径20.8cmを測る。胴部は長胴気味で、内外面にハケメ調整が施される。3も2にちかい形態をもつが、小型のものである。口径は15.3cmである。胴部外面に縦方向のハケメがみられる。4は胴部が大きく張り、球状にちかい胴部形態を呈するものと考えられる。口径は17.6cmである。口縁端部はやや上方につまみ上げられた感じをもつ。胴部外面はハケメが、また内面は器面が荒れて不明瞭であるがケズリが施されている。

5から7は高坏である。5は口縁部が大きく外反するもので、下半部は比較的浅めである。内外面にヘラミガキがみられる。6、7は脚部で、いずれも長脚のものである。

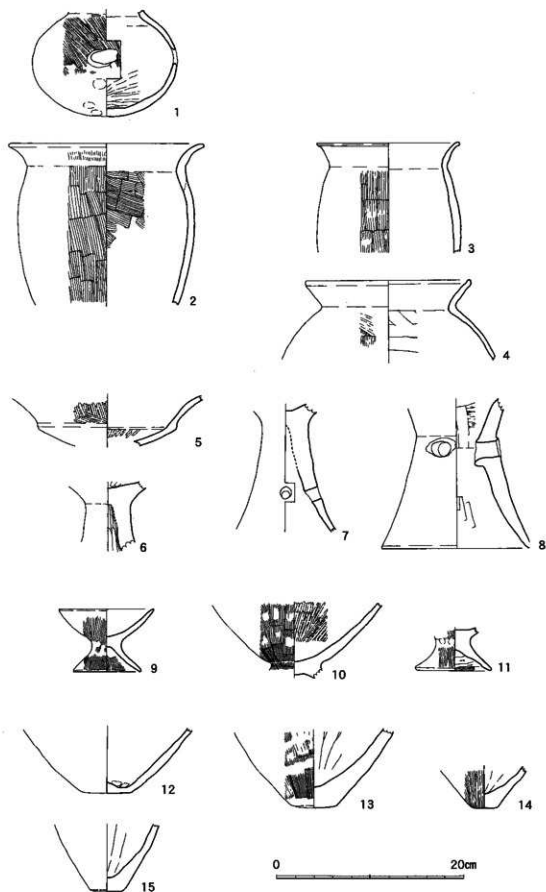
8は器台である。くびれ部付近に穿孔をもつ。

9から11は脚付き鉢である。9は浅い鉢部に短めの脚部が付く。口径は10.1cmを測り、鉢部内面がナデにより平滑に仕上げられる以外はハケメ調整である。10はやや大型のもので、内面にヘラミガキがみられる。11は短い脚部で、底径は8.3cmである。外面はハケメ、内面はケズリとハケメがみられる。

12から15は壺、甕の底部である。いずれもしっかりとした平底を呈する。



第4図 安国寺遺跡 土壌1



第5圖 安國寺遺跡 土壇1出土土器

(2) 土壌2

土壌2(第6図)は、調査区の南から西にかけてみられるが、その大半は調査区外に及ぶため全容は不明である。現状で東西13.8m以上、南北3.1m以上を測る大型の遺構である。また、深さは0.7mから1.0mである。平面形態については不定形気味であるが、遺構の重複は一部を除いて基本的になかったものと考えられる。これは、土層図(第7図)をみても明らかである。すなわち土壌2は、いくつかの遺構が重複して結果的に大型の形状を示すものではなく、本来的に大規模なものであったようである。壁の立ち上がりについては、どの方向からもかなり緩やかである。床面は多少のレベル差はあるものの、全体としてはほぼ平坦である。土壌2は、黄色粘土層、白色粘土層を過ぎ、円礫混じりの層にいたり床面を形成するが、これは土壌1とも共通する。床面には細かな凹凸が顕著に認められる。土器は、床面ちかくあるいは床面よりやや浮いた状態でやや大きめの完形にちかいものも出土した。しかし、特に土器の出土が集中する層はなく、下層から上層まで平均して出土するが、大型品は主として下層から出土する傾向が認められた。

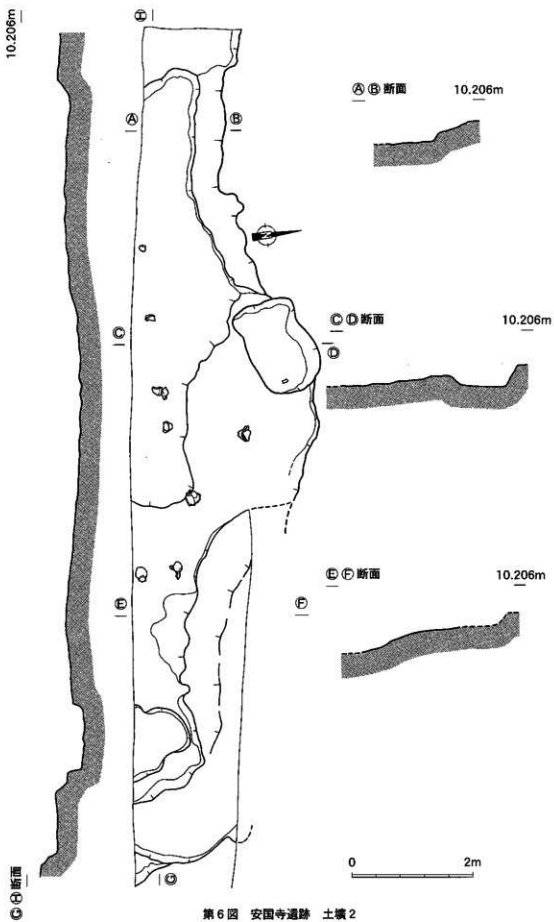
この土壌2は、土層図でも明らかのように自然堆積のため埋没したものと考えられる。西側の土層では、この土壌2がほぼ完全に埋没した後に溝1に切られている状況が確認される。時間的には土壌2→溝1の変遷が明らかである。

出土土器(第8、9、10、11図)は、壺、甕、高坏、脚付き鉢などがある。

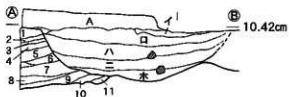
16から28は壺である。このうち16から22は二重口縁壺の口縁である。16は23.6cmで、口縁が短く直立気味に立つ。口縁端部は角張り、上面がやや凹み気味である。長くのびた頸部下には断面三角形の突帯が付される。口縁部には、ヘラ状工具による4本単位の沈線による連続山形文が施される。17は口縁外面にヘラによる文様が、また19は口縁外面に櫛描波状文を施すものである。口径は17が17.7cm、19が16.3cmである。両者とも短めの口縁が内傾する。18、20は口縁外面が無文のものである。いずれも口縁が内傾して立ち上がるが、20は内湾気味である。口径は18が17.6cm、20が20.4cmである。21は口径16.1cmで、口縁が内傾して立ち上がる。外面にヘラ描きによる山形文様がみられる。22はやや長めの口縁部が直立気味に立つ。外面には櫛描波状文が施される。

23、24は壺の頸部である。23は長くのびた頸部下に断面三角形の突帯が付され、細かな刻目が施される。24は23に比べ頸部が短い。頸部下にベルト状の突帯を付し、刻みをいれる。25は頸部より上を欠くものである。頸部下には、刻みをもたないベルト状の突帯を付す。胴部は中程よりやや上に最大径をもち、底部はしっかりした平底を呈する。調整は外面が、底部付近に板状工具によるナデがみられるほかはナデで平滑にされている。内面は、頸部下にユビオサエ、そのほかに板状工具によるナデがみられる。26は、口縁部を欠くが短頸壺か。胴部は中程に最大径をもつもので、全体としては卵形を呈する。底部は一部に極度の摩擦がみられるが、本来は平底である。胴部外面にはヘラ状工具による縦方向のナデがみられ、内面にはナデやユビオサエがみられる。27も短頸壺である。口径は8.5cmで、胴部からやや反気味に短く直立する。胴部は頸部からゆるやかに続く。上半はなで肩状を呈し、中程に最大径をもつ。調整は、内面頸部下にユビオサエがみられるほかは、内外面ともナデにより平滑にされる。28は偏球形の胴部をもつもので、頸部下には断面三角形の突帯が付される。基本的に内外面ともナデにより平滑にされる。

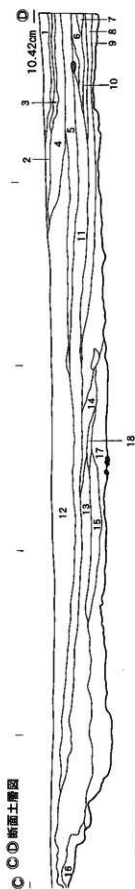
29から37は甕である。29は小型のもので口径12.0cm、底径2.0cm、高さ14.2cmを測る。最大径は口縁部にあり、短く折れた口縁部から長めの胴部にいたる。底部は小さな平底を呈する。30は口径21.2cmを測る。調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面がナデ、胴部内面がオサエとハケメである。胴部外面全体にスズ状付着物がみられる。31は口径18.8cmである。口縁部は強くくの字状に折れ、端部は角張り。調整は口縁内外面がヨコナデ、胴部外面がナデ、胴部内面がナデ及び板状工具によるナデ。32は口径22.7cmを測る。調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面が縦方向のハケメ、胴部内面がナデである。33は口径20.8cmである。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はナデ、胴部内面もナデで一部に板状工具の痕跡が認められる。34は口縁が強く外方に折れるもので、口径24.0cmである。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデである。35は口縁部の短いものである。口縁はなで肩状の胴部から短く立ち上がり、端部にいたりやや外反する。調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面が縦方向のハケメ、胴部内面にはヘラケズリがみられる。36は口径20.2cmを測る。口縁部はやや緩やかに外方に折れ、肩が張り気味の胴部へ続く。最大径は胴部中程にある。調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面がナデで平滑に、そして胴



㉔ ㉕ 断面土層図



- A層 黄褐色砂質粘質土層
 1号溝埋土
 イ層 黄灰色砂質粘質土層
 ロ層 淡黄灰色砂質粘質土層
 ハ層 黄灰色粘質砂質土層
 ニ層 灰色粘質土層
 水層 黒褐色粘質土層(土器を多く含む)
 土壌2埋土
 1~9層 (㉔ ㉕ 断面土層図参照)
 10層 茶褐色粘質土層
 11層 灰色粘質土(地山ブロック含む)



- 土壌2埋土
 1層 黄灰色粘質砂質土層
 2層 灰色粘質砂質土層
 3層 灰色粘質土層
 4層 灰色粘質砂質土層
 5層 灰色粘質砂質土層(レキ、土器含む)
 6層 暗灰色砂質粘質土層(土器を含む)
 7層 灰色砂質土層(レキを含む)
 8層 灰色粘質土層
 9層 暗灰色粘質土層(地山ブロック含む)
 10層 灰色粘質土層
 11層 茶褐色粘質砂質土層
 12層 黄灰色粘質砂質土層
 13層 黄褐色粘質土層
 14層 黄灰色粘質土層(地山ブロック含む)
 15層 暗灰色粘質土層(地山ブロック含む)
 16層 黒褐色粘質土層
 17層 暗灰色粘質土層
 18層 灰色粘質土層

第7図 安国寺遺跡 土壌2 溝1土層図

部内面は頸部下がユビオサエとナデ、それ以下が下から上へのヘラズリがみられる。37は口径17.0cmである。胴部はなで肩状を呈し最大径は胴部中程にくる。口縁部は外方にくの字状に折れ、端部を外側にややつまみ出す。調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面がナデ、胴部内面がユビナデのち下から上へのヘラズリである。

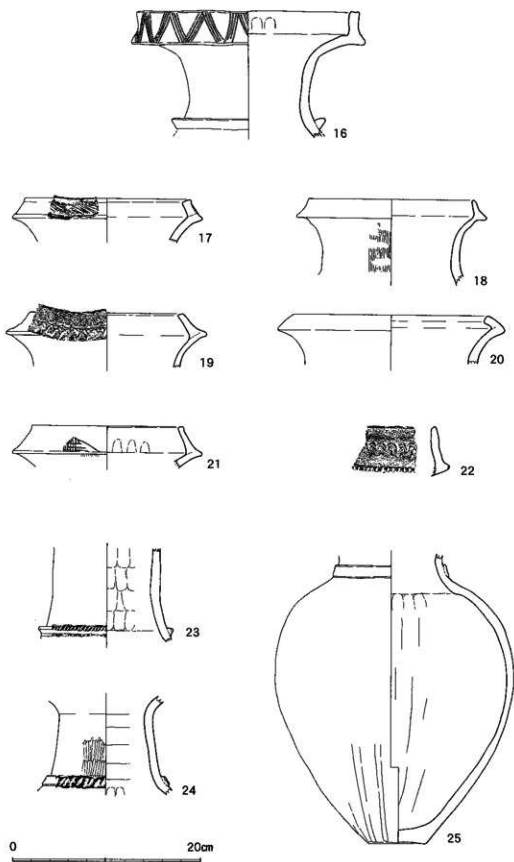
38、39、41から44は高坏である。38は坏部で、口径28.8cmを測る。口縁部の立ち上がりは短く直立気味に立ち、端部ちかくで外反する。坏部と口縁部の接合部は比較的上位にあり、坏部は深目である。調整は内外面ともヨコナデあるいはナデで、坏部内面のみヘラ状工具を用いたナデである。39も坏部である。口径は22.5cmと38に比べ小振りである。坏部は深目で、口縁部をわずかに外反させる。口縁端部は上方につまみ出す。調整は口縁内外面がヨコナデ、外面がナデ、内面が横方向のヘラミガキである。41は脚部である。比較的短めのもので、底径は16.2cmを測る。脚部上部はハの字状を呈し、裾部が大きく開く。端部は下方にややつまみ出された感を呈する。裾部が大きく開きはじめる部分に、円形の透かし穴がみられる。調整は、外面が裾部はヨコナデ、その他は縦方向のハケメ後一部ヘラミガキである。また内面はヘラなどによるナデがみられる。42は長脚の脚部である。坏部との接合部には円盤充填技法がみられる。裾部が大きく開くが、開きはじめる部分に円形の透かし穴が施される。調整は外面がナデ、内面には絞り痕とナデがみられる。43も長脚の脚部である。円形の透かし穴が二段にわたり施される。調整は外面に縦方向のハケメ、内面に絞り痕がみられる。また、坏部との接合部には円盤充填技法がみられる。44も長脚の脚部であるが、42、43に比べるとやや大きめである。裾部にむけて大きく開きはじめる部分に、円形の透かし穴がみられる。調整は外面が縦方向のヘラナデ、内面が絞り痕とナデである。

40は脚付き鉢の鉢部であると思われる。鉢部はそれほど深くなく、そのまま口縁にいたる。調整は内外面ともナデで平滑にされる。

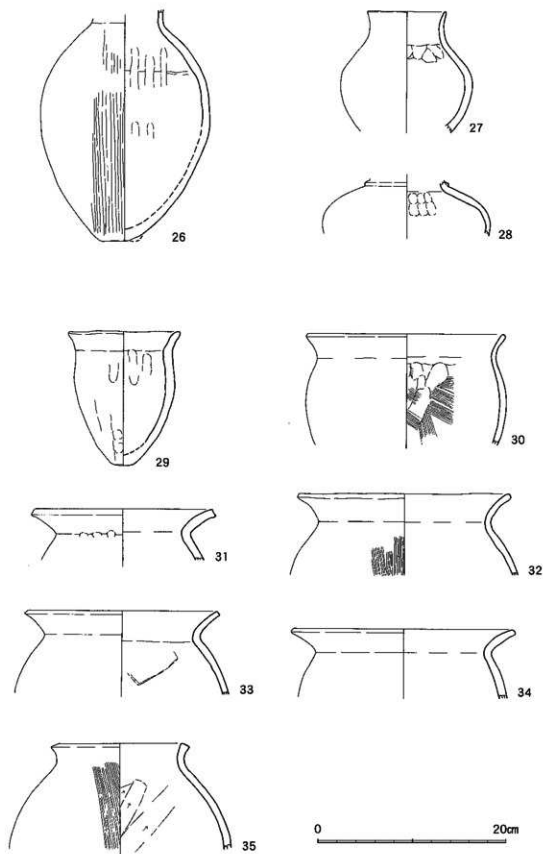
58はミニチュアの土器である。口縁部は欠くが、長胴気味の胴部がみられる。底部は丸底にちかい形態を呈する。調整は外面に板状工具などのナデが、また内面はユビナデがみられる。

45から57は壺や甕の底部で、いずれもしっかりした平底を呈する。45は底径7.7cmで、外面には板状工具による縦方向のナデが施される。同様のナデについては、底部外面にもみられる。内面はナデにより平滑にされる。46は底径9.1cmを測る。外面は縦方向のヘラナデがみられる。内面は剥落が著しく調整不明である。47は底径8.4cmで、円盤をはり付けたような底部形態を呈する。外面には縦方向のハケメがみられ、内面はナデ後一部にヘラミガキが施される。48は底径7.3cmとしっかりとした平底であるが、平坦にはならず凸レンズ状を呈する。調整は、外面が縦方向のハケメ後ナデ、内面がナデで平滑に仕上げる。49は底径5.4cmである。外面には縦方向の板状工具によるナデとともに底部ちかくにはユビオサエがみられる。また、内面はナデとユビオサエがみられる。50は底径7.2cmである。胴部は中程よりやや上部に最大径がくるものと思われる。調整は、外面がナデと縦方向のハケメ、内面がナデにより平滑に仕上げられ一部にユビオサエがみられる。51は底径5.9cmで、全体の大きさに比べ底部が小さい印象を受ける。胴部は長胴気味のもので、外面には縦方向のハケメが施される。また、内面中程までは横方向のナデ、下半は縦方向のナデである。52は底径3.5cmを測る。外面は縦方向の板状工具によるナデ、内面は横方向のナデ、また外底面はヘラナデがみられる。53は底径3.9cmで上げ底状を呈する。内外面ともナデ仕上げである。54は3.8cmを測る。調整は内外面ともナデ仕上げであるが、外底面と外面底部ちかくにはユビオサエがみられる。55は小型品で、底径2.0cmを測る。外面はナデで、底部ちかくには板状工具による縦方向のナデがみられる。また、内面はナデである。56は底径4.0cmである。調整は外面がナデ、内面がヘラナデ、また外底面はユビオサエのため凹凸がみられる。57は底径4.6cmを測る。外面には縦方向のナデが、また内面には横方向のヘラナデが施される。

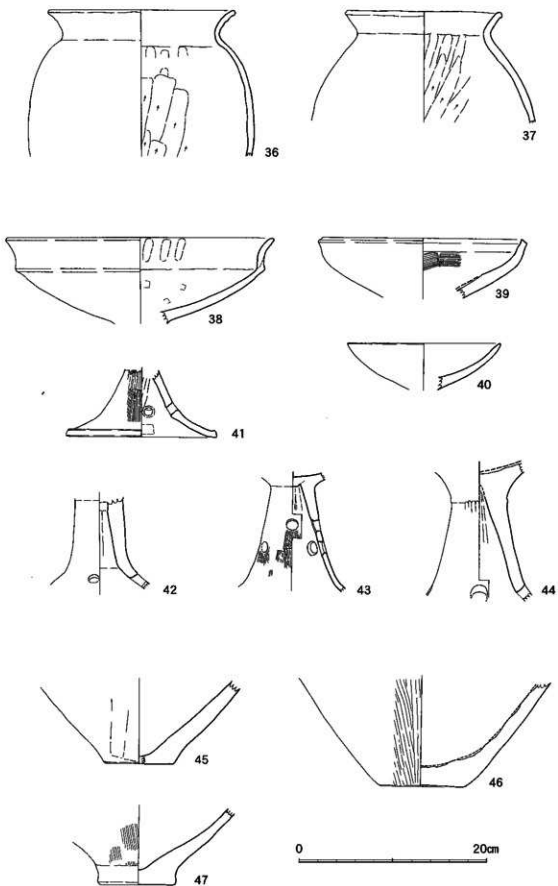
土壌2の時期は、出土土器から弥生時代後期後半から終末に位置づけられる。



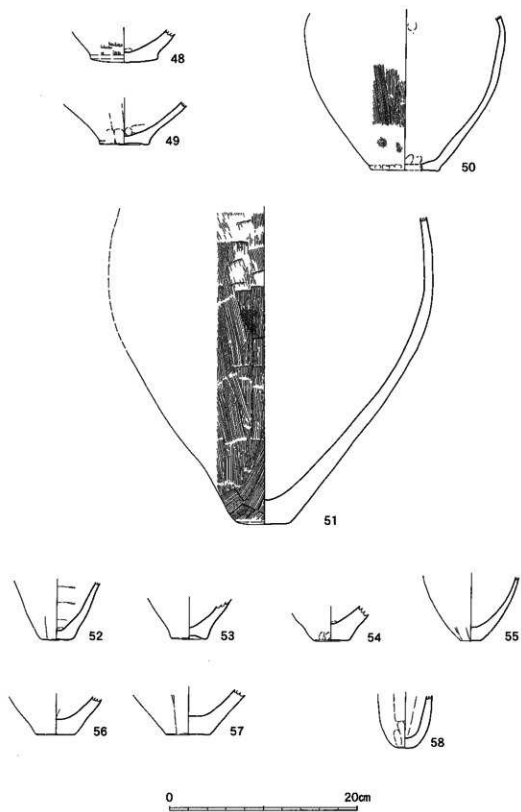
第8圖 安國寺遺跡 土坑2出土土器(1)



第9図 安国寺遺跡 土壇2出土土器(2)



第10圖 安國寺遺跡 土壙2出土土器(3)



第11圖 安國寺遺跡 土坑2出土土器(4)

2 溝

(1) 溝1、溝2

調査区中央の東西方向に溝1、溝2がみられる(第3図)。両者は同様な位置にあり切り合い関係が認められ、溝1が溝2を切る。

溝1は幅1.3から1.6mを測る。一部不明確な部分もあるが、調査区の東から中央付近までは直線的にのび、西側にいたりやや蛇行する。最も深い部分で0.8mで、断面U字形を呈する。溝の断面土層(第7図)は粘質及び砂質層の堆積がみられ、掘り直しなど認められない。出土遺物の大部分は土器で、その大半は小破片である。遺物が比較的集中するのは最下層の黒褐色粘質土層であるが、中層、上層からも遺物の出土はみられた。溝1は調査区西側で土壌2と重複し、土壌2がほぼ完全に埋没した段階で土壌2を切る。

溝2はほぼ溝1と重なるように位置し、ほぼ直線的にのびる。規模、形状とも溝1と同様で、溝1に切られる。しかし、土壌1や土壌2などとの関係は不明である。溝2の大半は底面ちかくが残存するのみであるが、底面ちかくの最下層からは遺物の出土は散発的で、小破片のみであった。このため、溝2の時期を明確に決定できるまでの資料を得ることができなかった。

以下で出土土器(第12、13、14、15、16、17、18図)を紹介するが、これらはいずれも溝1出土のものである。土器は、壺、甕、高坏、器台、鉢、脚付鉢などがある。

59から76は壺である。このうち59から68は二重口縁壺の口縁である。59は口径14.6cmで、口縁は直立気味である。口縁部外面は無文で、頸部に縦方向のハケメがみられる。また、内面にはユビオサエなどがみられる。60はいわゆる安国寺式の二重口縁壺とは形態がやや異なる。胴部から頸部が短く開き、口縁部は内側に短くくの字状におれる。口縁部付近はかなり厚めに作られている。口縁部外面は無文であるが、赤色顔料の塗布の痕跡がみられる。外面頸部から胴部にかけては縦方向のハケメ、内面はオサエとヨコナデである。口径は16.8cmである。61は口径17.0cmを測る。頸部に比し短めの口縁が内傾気味に立つ。口縁外面には櫛播波状文などの文様はみられないが、指による連続的なオサエが施される。調整は、外面頸部が縦方向のハケメ、内面にも横ないしは斜方向のハケメがみられる。62は口径9.3cmの小型品である。口縁部は内側に強くくの字状に折れる。口縁外面には櫛播波状文が施され、頸部には横方向のハケメと縦方向のハケメがみられる。内面はヨコナデである。63は口縁部が内傾気味に立ち上がり、端部が平坦になる。口縁端部上面には竹管状の工具による刺突が施される。調整は内外面ともヨコナデ、ナデである。口径は20.8cmである。64は63と同様な器形を呈する。口径は19.5cmを測る。口縁部はヨコナデ、頸部には内外面ともハケメがみられる。65は口径20.5cmで口縁直立気味である。口縁外面に櫛播波状文がみられ、頸部外面には縦方向のハケメがみられる。66は比較的短めの頸部から口縁が内傾する。頸部下には突帯などは付されない。口縁外面には櫛播波状文が施され、頸部外面はヨコナデと下部に縦方向のハケメがみられる。口径は16.0cmである。67は口縁端部を欠くが、外面に櫛播波状文が施される。68は畿内系の二重口縁壺である。口縁は大きく外反するもので、端部はやや角張る。口縁立ち上がり部には、円形の浮文が付される。調整は内外面ともヨコナデである。69から75は、口縁部を欠く頸部から胴部の資料である。69は二重口縁を有するものと思われる。頸部下にはベルト状の突帯が1条付され、斜方向の刻みが施される。胴部は球形を呈すが、底部は平底である。調整は、摩擦のため不明な部分が内外面にあるが、大部分がナデにより平滑にされている。胴部最大径は21.0cmである。70は頸部下から胴部上半にかけての資料である。頸部下にはやや細目のベルト状の突帯が付され、斜方向の刻みが施される。刻みを施す際に、突帯からはみ出し胴部にもへら状工具の痕跡が残る。調整は、外面がナデ、内面が斜方向のハケメである。71は頸部の資料である。頸部下には断面三角形の突帯が1条付される。72も頸部の資料である。やはり頸部下に断面三角形の突帯が1条付される。頸部はわずかに直立気味に立ち、口縁にむかい大きく開く。調整は、頸部外面が板状工具による縦方向のナデ、内面がナデとユビオサエである。73は胴部から頸部が大きく開くものである。調整は、外面が縦方向のハケメ、内面が頸部はナデ、胴部は斜方向のハケメである。74は頸部下の資料である。頸部下には断面三角形の突帯が付され、その下部にへら状工具による文様が施される。調整は、外面が縦方向あるいは斜方向のハケメ、内面が部分的な横方向のハケメとナデである。75は小型品の胴部から頸部である。やや張り気味

の肩部から短く頸部が直立し、口縁にむかい開く。調整は、外面が縦方向のハケメと部分的なオサエ、内面がオサエとナデである。

76は小型の短頸である。胴部は球形にちかい形態を呈し、口縁部が短く直立する。口縁端部はわずかに尖り気味である。調整は胴部外面がハケメ、胴部内面がナデ、オサエと縦方向のハケメである。口径は10.0cmである。

77から91は壺である。このうち77から89は内面にヘラケズリがみられない一群である。77はやや雑な作りの感があるものである。口径は14.2cmを測り、胴部は長胴気味である。頸部から口縁にかけては緩やかに外反し、端部を上方につまみ上げる。調整は内外面ともユビオサエや板状工具によるナデがみられ、一部ではハケメも残る。78は口径14.9cmを測る。口縁部は胴部から外反気味に外に折れる。調整は口縁部内外面がヨコナデであるが、外面口縁下にはユビオサエがみられる。胴部は、外面が縦方向のハケメ後板状工具による横方向のナデ、内面は板状工具によるナデとオサエである。79は口径13.2cmで、なで肩の胴部から口縁がくの字状に折れる。調整は胴部外面が、オサエと板状工具によるナデ、内面が板状工具あるいはヘラ状工具による横方向のナデが施される。80は口縁部が比較的長めにのび、端部をわずかに外方に折る形態をなす。口径は13.6cmとやや小型品である。調整は、外面が縦方向のハケメで口縁部付近はハケメの後ヨコナデである。また内面は、口縁部付近がヨコナデ、頸部から口縁部にかけては横方向のハケメ、胴部がオサエとナデである。81は口径15.2cmを測る。調整は、口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面が縦方向のハケメ、胴部内面がナデとオサエである。82は頸部がやや直立気味に立ち、口縁部にいたり緩やかに外反する。口径は16.8cmである。調整は、口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面が縦方向のハケメ、内面が斜方向のハケメである。83は口縁部が比較的長めにのびる。口径は15.9cmを測る。調整は外面がヨコナデで、口縁部付近はハケメの後ヨコナデが入る。内面は、口縁部がヨコナデ、胴部がナデとオサエである。84は口径21.8cmを測る。口縁部は胴部から外方向にくくの字状に折れるが、中程からやや外反気味になる。口縁部内外面はヨコナデが施されるが、外面にはユビオサエが残る。胴部外面は縦方向のハケメ、内面はオサエとナデである。85は口径20.2cmで、口縁は頸部から直立気味に立ち、端部にむかい緩やかに外反する。調整は、外面が縦方向のハケメで、口縁部付近はヨコナデが施される。内面は、口縁から頸部にかけてが横方向のハケメ、また胴部がオサエとナデである。86は短めの口縁が胴部からあまり外方に折れずに立つ。調整は口縁部周辺がヨコナデで、口縁部外面にはユビオサエがみられる。胴部外面は摩擦のため不明である。また、内面には口縁部にオサエがあり、頸部から胴部にかけて部分的にハケメが認められる。口径は20.6cmである。87は口径19.2cmを測るもので、口縁部は外方にくの字状に折れる。調整は内外面ともヨコナデである。88は口径21.2cmを測る。口縁部は短めで、やや外反しながらくの字状に折れる。口縁端部はやや尖り気味である。調整は、口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面が縦方向のハケメである。また内面は、口縁部内面に一部横方向のハケメが残り、胴部は斜方向のハケメとオサエがみられる。89は内外面にハケメが顕著に残るものである。口縁部は胴部から緩やかに外反する。調整は外面が縦方向のハケメが施され、内面は口縁部ちかくが斜方向のハケメ、胴部が縦方向のハケメである。

90、91は胴部内面にヘラケズリがみられる一群である。90は口径15.2cmの小型品である。口縁部は外方に強くなる字状に折れ、端部がやや上方に引き上げられる。調整は外面口縁部がヨコナデ、胴部が縦方向のハケメである。また内面は口縁部が横方向のハケメ、胴部が横方向あるいは斜方向のヘラケズリが施される。しかし、ヘラケズリは全面に及ばない。91は口径20.4cmを測る。口縁部は強くなる字状に折れる。口縁端部は角張る。外面はヨコナデ、内面は口縁部がヨコナデ、胴部が斜方向のヘラケズリである。

92から114は高坏である。このうち92、93は口縁部である。両者とも同様な器形を呈し、口縁部が大きく外反する。調整は92が内外面ともヨコナデ、ナデである。また、93は口縁部外面が縦方向のハケメ、他は内外面ともヨコナデである。

93から114は脚部の資料である。94は円柱状の脚部から坏部が大きく斜方向に直線的にのびる。外面には板状工具によるナデが縦方向に施される。内面はナデ調整である。95は外面と坏部内面に赤色顔料の塗布が認められる。脚部は長脚気味のもので、坏部は脚部からL字状に折れる。坏部底面は平坦になるものと考えられる。脚部には円形の刺突がみられる。96も外面と坏部内面に赤色顔料の塗布が認められる。脚はやや円筒状にのび、底部にむかい大きく開く。坏部は脚からL字状に折れ、その後口縁にむかい立ち上がる。調整は外面脚部がヘラナデ、坏部内面がヘ

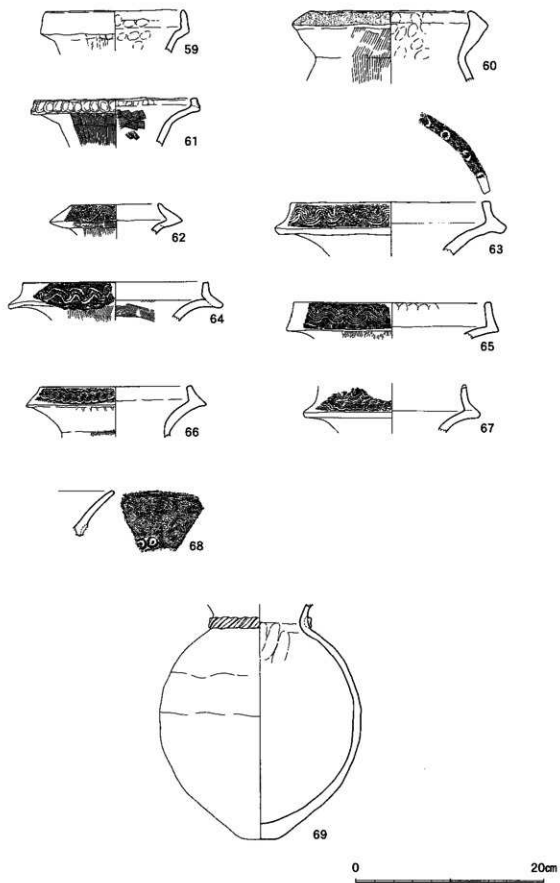
ラムギキである。97は円筒状の脚部から坏部にいたる。また裾部にむけても大きく開く。調整は外面に縦方向のヘラムギキがみられる。98は短い円柱状の部分から裾部にむかい大きく開く。調整は内外面ともナデである。99も98と同様な器形を呈する。外面と坏部内面にヘラムギキが施される。また、内面には裾部に横方向のハケメがみられる。100は円筒状の脚部から坏部が開く。調整は、外面坏部がハケメ、脚部が縦方向のヘラムギキである。また、坏部内面にもヘラムギキがみられる。101も円筒状を呈するもので、外面に縦方向のハケメがみられる。102は長脚のもので、外面は縦方向のナデである。103、104、105は102に比べやや太く短めである。103は外面に一部ハケメが残る。また、内面にも横方向のハケメがみられる。105は円形の透かし穴が施される。106は円筒部があまり長くのびないものである。107は底径14.8cmを測り、円形の透かし穴が4個配されるものと思われる。調整は、外面が縦方向のハケメの後縦方向のヘラムギキが施される。108は短めの脚である。3箇の透かし穴が施される。調整は、外面が縦方向のハケメ、内面はナデである。底径は11.1cmを測る。109は比較的に長めのもので、底径14.4cmを測る。調整は、外面が縦方向のヘラムギキである。また、円形の透かし穴が6個配されるものと思われる。110は低脚のもので、外面と坏部内面に赤色顔料の塗布がみられる。また、円形の透かし穴が4個配されるものと思われる。調整は、外面が板状工具による縦方向のナデ、内面がヘラ状工具による横方向のナデである。111も外面に赤色顔料の塗布がみられる。器形は、短い円柱部から裾部にむかい大きく開く。調整は外面に縦方向のハケメ、内面に横方向のハケメがみられる。112も外面に赤色顔料が塗布される。脚は裾部にむかい大きく開く。外面は、脚部の一部に斜方向のハケメがみられるが、他はナデである。脚部内面にもハケメがみられる。円形の透かし穴が4個配される。113は裾部にむかい大きく開き、端部は角張った仕上げである。円形の透かし穴が4個配されるものと思われる。外面には縦方向のヘラムギキが密に施され、内面にも一部ヘラムギキがみられる。外面には赤色顔料の塗布がみられる。114は屈曲する脚部で、上段に円形の透かし穴がみられる。外面には赤色顔料が塗布される。調整は、外面に細かい縦方向のハケメが、また内面は細かいハケメとナデがみられる。

115から121は器台である。115は二重口縁状を呈する口縁が内傾する。口縁外面には細いヘラによる文様が施される。口径は33.6cmを測る。116から121は上半にえぐりがはいるものである。116は背後に縦方向のヒレ状の貼り付けがみられる。また、117は背後に舌状の貼り付け突起が施される。118は底部である。他のものが緩やかに底部にいたるのに対し、118は底部付近で強く屈曲する。119はベルト状の突帯が付される。突帯は雑な作りで、不明瞭である。120は口縁部である。通常上半分に1ヶ所のえぐりがはいるが、120には2ヶ所のえぐりが施されていたものと思われる。121は背後に付される棒状の突起である。

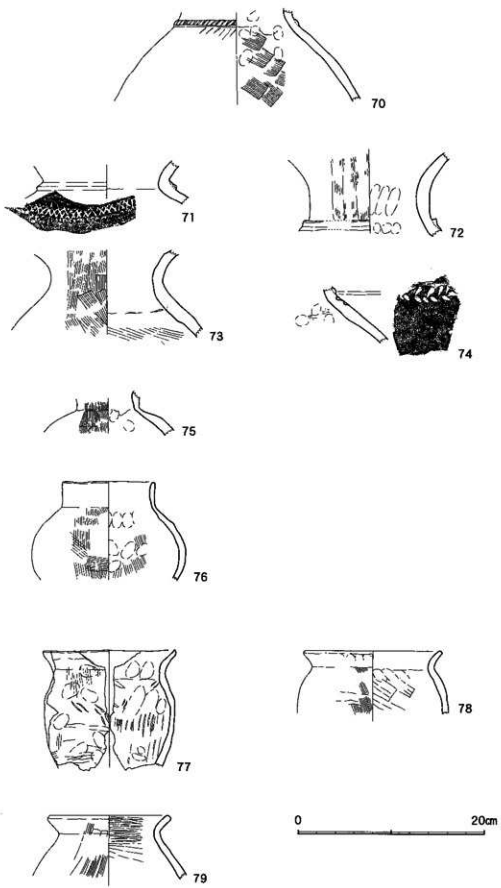
122から124、128、129は鉢である。122は口径13cmを測る小型品である。胴部は球状を呈し、口縁が短く外反する。123は二重口縁状の口縁を呈するもので、口径26.0cmを測る。口縁部は端部にむかい短く外反する。124は砲弾状の器形を呈する。口径15.0cmを測り、底部には焼成前の穿孔がみられる。外面には、斜方向のやや大きめの平行タタキが施される。128は内外面に赤色顔料が塗布される。小型品で、底部は丸底を呈する。調整は外面がナデ、内面が縦方向のヘラムギキが施される。129は手づくねで、口径7.6cmを測る。器高は低く丸底を呈するもので、内外面にユビオサ工痕が残る。125から127は脚付き鉢である。123は筒状の鉢部に短い脚が付される。口径13.0cm、高さ8.2cmを測る。126は外面に、また127は外面と鉢部内面に赤色顔料の塗布が各々みられる。126は122のような器形のものに脚が付される。外面はハケメ、内面はナデが施される。130は棒状の突起部で、何らかのものに付されていたものであろう。

131から154は壺や甕の底部である。全体として平底が多く、わずかに平底が残るものもみられる。丸底を呈するものはほとんどみられない。

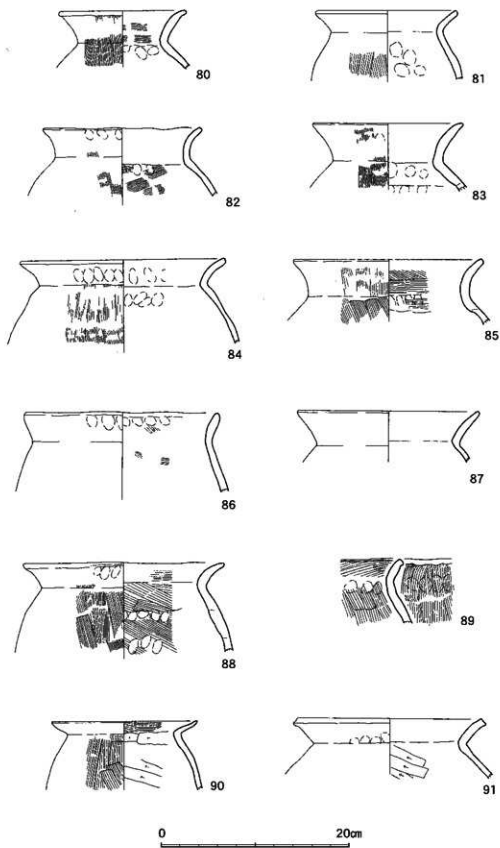
以上の土器は一部古相のものを含むが、埋没年代は弥生時代終末以降と思われ、最終的には古墳時代に入る可能性をもつ。



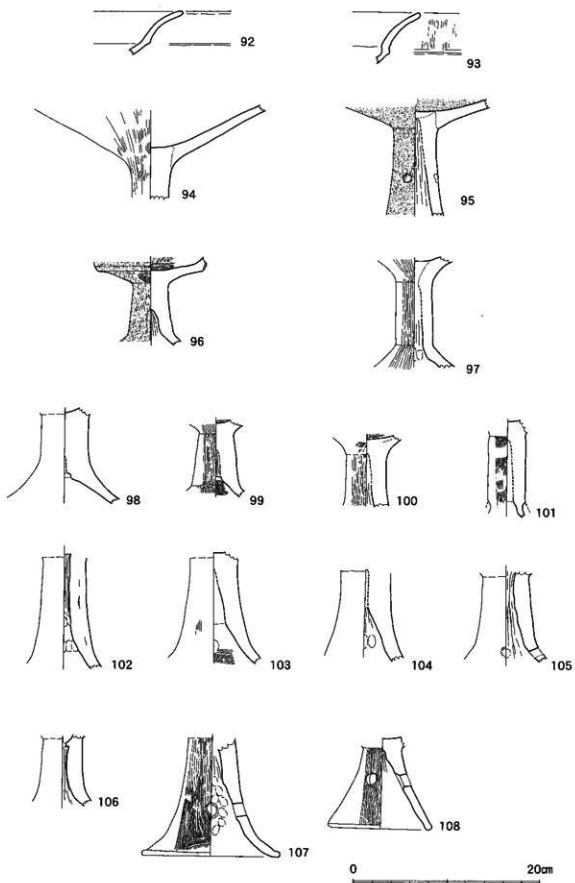
第12図 安国寺遺跡 溝1出土土器(1)



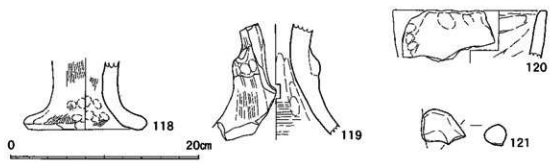
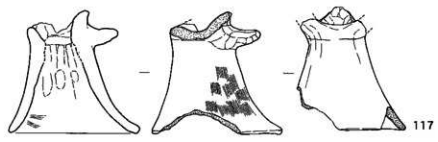
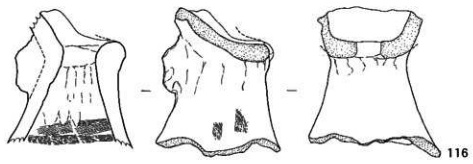
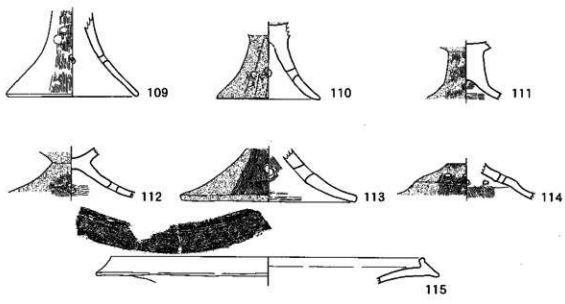
第13图 安国寺遗址 汉1出土土器(2)



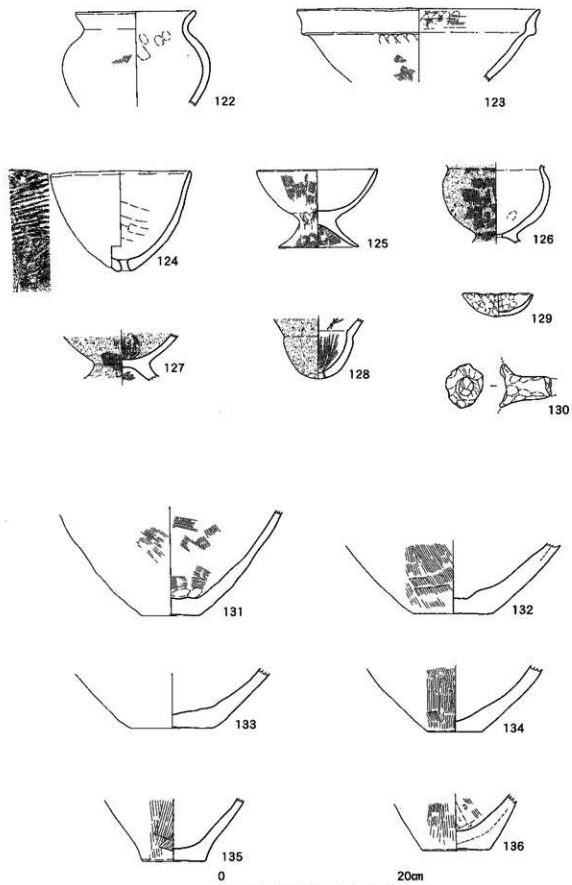
第14图 安国寺遺跡 溝1出土土器(3)



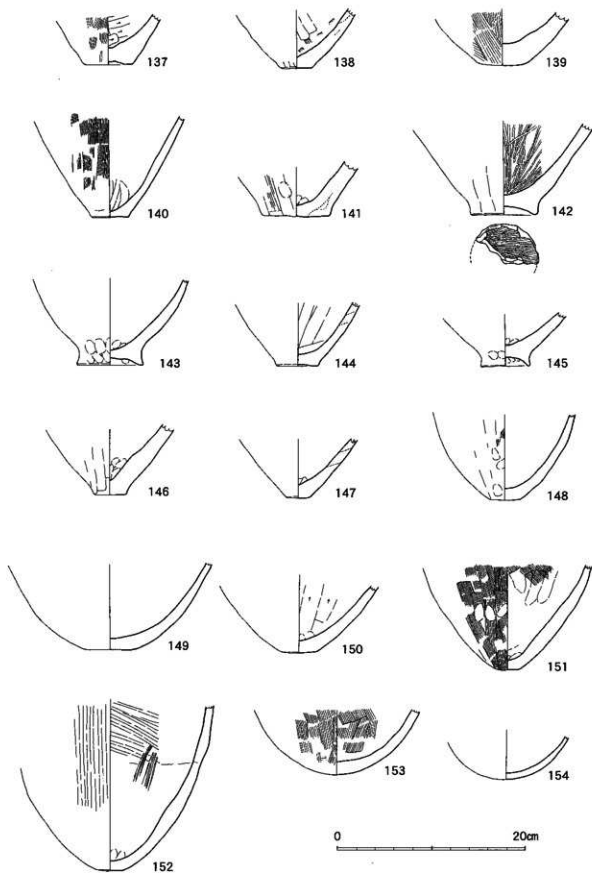
第15圖 安國寺遺跡 漢1出土土器(4)



第16圖 安国寺遺跡 溝1出土土器(5)



第17图 安国寺遺跡 溝1出土土器(6)



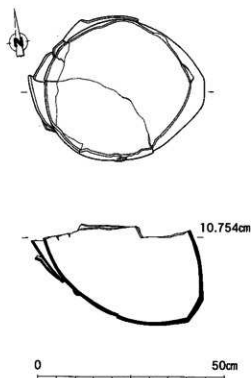
第18图 安国寺遺跡 溝1出土土器(7)

3 壺 棺

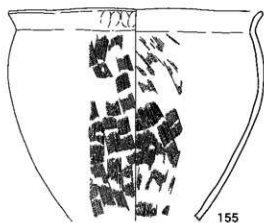
小児用の壺棺(第19図)を1基検出した。壺棺は溝1、2の北側に位置するもので、他に同様な壺棺などは確認されなかった。

壺棺は、水田耕作のため上半部が削平された状態で確認した。削平のため必ずしも明確ではないが、合わせ口であった可能性をもつ。下棺の蓋に加え上棺と推測される甕の一部が検出された。しかし、甕の口縁が壺と同じように上を向いていることから、いわゆる合わせ口の形態をとるものではなく、甕を破砕し壺の周囲に置いた可能性も考えられる。壺棺の主軸は東西方向にもち、口縁部を西方向に向け約45°に傾けられ状態で安置されていた。しかし、割り方については、精査したにもかかわらず明らかにすることができなかった。また、壺棺及び周囲から伴出した甕には、内外面とも赤色顔料の塗布などは全くみられなかった。このほか、壺棺内部からの出土遺物については、全く確認されなかった。

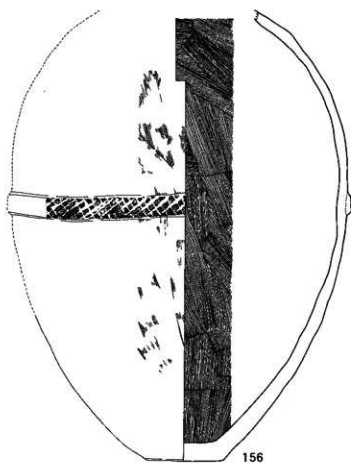
以下では、壺棺に使用された土器(第20図)を紹介する。155は甕である。いくつかの破片を接合したものであるが、削平のため全形を復元するにはいたってない。よって、現状では底部を欠くが、本来どのような状況で壺棺に利用されたかは不明である。復元口径は26.6cmを測るもので、胴部最大径とほぼ等しい。口縁部は短いもので、やや反気味に外に折れる。胴部は肩部が張り、底部にむかいすぼまる。調整は口縁部内外面がヨコナデで、外面にエビオサエ痕跡がみられる。胴部外面には、斜方向あるいは縦方向の細かいハケメが断続的に施される。また、胴部内面は上半が斜方向、下半が縦方向の細かいハケメがみられる。156は壺である。現状では頸部より上を欠くが、削平されていたため本来頸部を打ち欠いたりしていたかどうかは不明である。器形的には長胴を呈し、胴部中程に最大径をもつ。胴部最大径は36.4cmである。また、外面胴部中程にベルト状の突帯が付され、斜格子のヘラ描き文が施される。底部は明確な平底を呈し、底径8.2cmを測る。調整は、外面が縦方向あるいは斜方向のハケメの後縦方向のヘラミガキが施されており、ハケメがほとんど消されている。内面は縦方向や斜方向のハケメがみられる。时期的には、弥生時代後期末の古段階に位置づけられる。



第19図 安国寺遺跡 壺棺



155



156

0 20cm

第20圖 安国寺遺跡 畫棺

4 その他の出土遺物

(1)土器

遺構検出作業中などに多くの土器が出土した(第21、22、23、24、25、26、27、28図)。

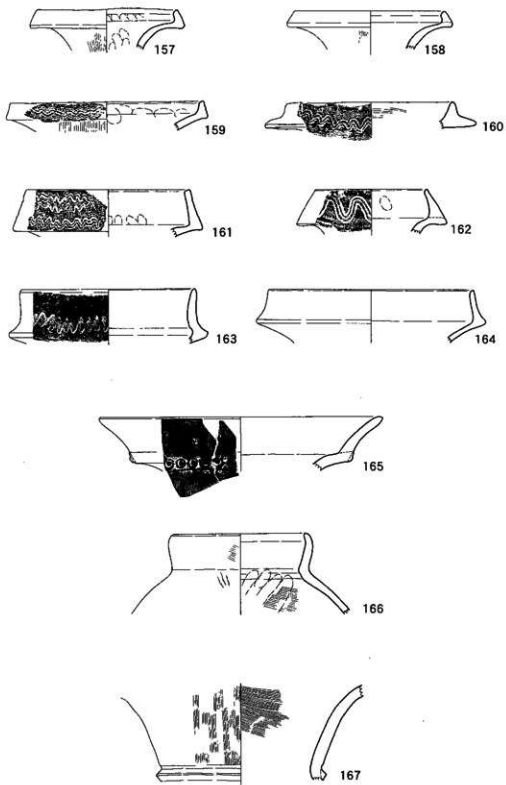
157から172は壺である。このうち157から165は二重口縁壺の口縁である。157、158は口径15、16cmの小型品で、短く口縁が内傾する。いずれも帯描波状文は施されない。159は口縁が短くくの字状に立ち上がり、外面に帯描文がみられる。160は口縁立ち上がり部が外方に大きく拡幅される。口縁外面には帯描波状文が施される。161から164は、口縁立ち上がり部が比較長のものである。164は摩滅が著しく不明だが、他はいずれも口縁外面に帯描波状文が施される。165は畿内系のもので、口縁が外方に大きく開きながら立ち上がる。口縁立ち上がり部には円形の浮文がはり付けられる。166は短頸壺で、口径14.6cmを測る。口縁部は内湾気味に胴部から立ち上がる。167から170は頸部付近のものである。167は頸部下に断面三角形の突帯を付すものである。内外面にはハケメ調整がみられる。168は小型品で、やはり頸部下に断面三角形の突帯が1条付される。169は口縁下に細いベルト状の突帯を付し、刻みが施される。170は頸部下に断面三角形の刻目突帯が付され、加えて2条の刻目突帯が胴部へ短く垂下される。171は胴部の破片で幅広いベルト状の突帯を付す。突帯には斜方向の刻みを施す。172は特異な形態をなすものである。胴部は下膨れの徳利状を呈し、頸部にベルト状の突帯を付す。突帯には刻みが施される。口縁は欠くが、頸部から口縁にむかい大きく開く。調整は外面が縦方向のヘラミガキ、内面がハケメ状のナデに加え、頸部下にヘラケズリがみられる。外面には赤色顔料の塗布が施される。

173から185は甕である。173は完形品で、口径16.2cm、高さ29.6cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、胴部は長胴気味の形態をなす。底部はわずかに平底状を呈するが、丸底化がすすんでいる。調整は、外面が縦方向のハケメ、内面が板状工具によるナデなどである。174から176は173と同様な形態をなすものである。外面にはいずれも縦方向のハケメが施され、内面については175のみ斜方向あるいは横方向のハケメがみられる。177は口径14.2cmの小型品で、外面と口縁部内面にハケメ、内面にヘラケズリがみられる。178はなで肩状の胴部から、長めの口縁が緩やかに外反する。外面には縦方向のハケメがみられる。179は口径19.4cmで、口縁が直立気味に外反する。180は大きく開く口縁部から長胴の胴部につづく。181は口縁部が大きく外反し、外面にはハケメがみられる。182は口縁が直立気味に外反する。183は球状の胴部に大きく外反する口縁部が付く。口径は19.4cmである。胴部外面には粗い斜方向のタタキがみられる。184は小型品で、球状の胴部をもつ。口縁部は強くくの字におれる。胴部外面はナデ調整であるが、内面にはヘラケズリが施される。185は184と同様な器形を呈すると思われるが、内面にはヘラケズリはみられない。

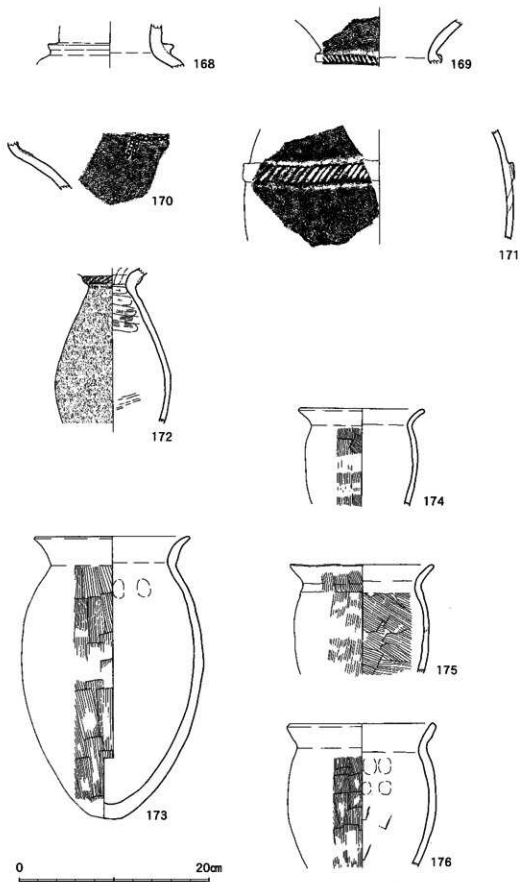
186から203は高坏である。186から188は坏部である。いずれも口縁部が内湾するものである。189から203は脚部である。189から195については、柄部にむかい緩やかに開く形態をもつ。これに対し、196から201はいったん円柱状に直線的にのび、その後割部にむかい開く形態のものである。以上のうち、196、197、199、201には赤色顔料の塗布がみられる。202は下部でいったん強く折れ、底部にいたるものである。これについては、他の一群とは時期的に異なり古墳時代の所産であろう。203は段を有する脚部である。外面には赤色顔料の塗布がみられる。屈曲部に連続の刺突文が施され、上段と下段の各々に円形の透かし穴が配される。

204はこれまでに類例のないもので、高坏または器台と思われる。口径は41.2cmを測る大型のもので、口縁は内側に短く粘土紐を巻き足し形作っている。

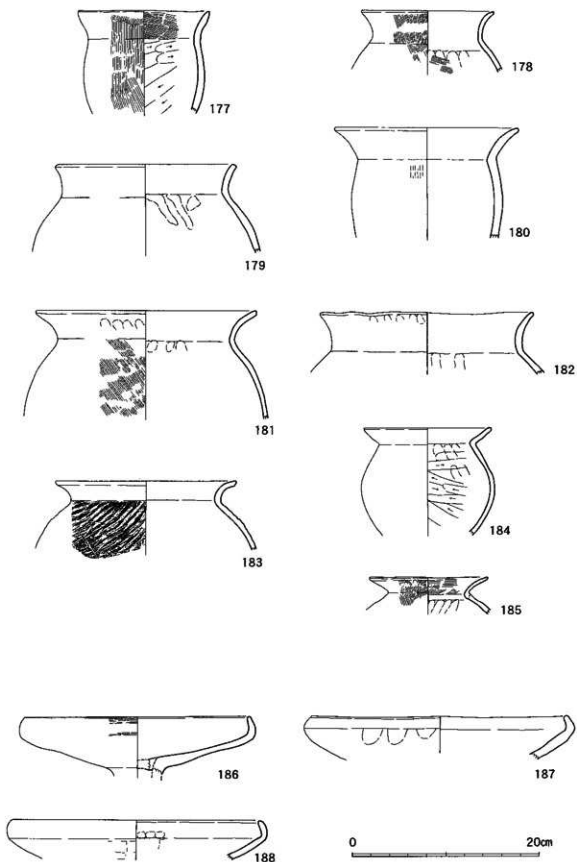
205から211はえぐりが入る器台である。205のaは正面からのもので、上半部の前面に大きなえぐりがみられる。bは背面で、くびれ部のやや下部に何か貼りつけられていたものがはがれた痕跡が2ヶ所にわたり確認される。調整は外面が主として縦方向のハケメ、内面が横方向のハケメとオサエである。206のaは正面からのものである。上半部の前面に大きなえぐりがみられ、上半部の後面はbの側面図でも分かるようにやや波うつ感じで低くなる。調整は、外面が縦方向の板状工具によるナデで、内面にはユビナデやユビオサエに加え底部付近に板状工具による横方向のナデがみられる。207は205や206にくらべると雑な作りである。やはり上半部にえぐりが入る。調整は内外面とも板状工具によるナデやユビオサエである。208、209は上半部の資料である。いずれも小破片からの復元で



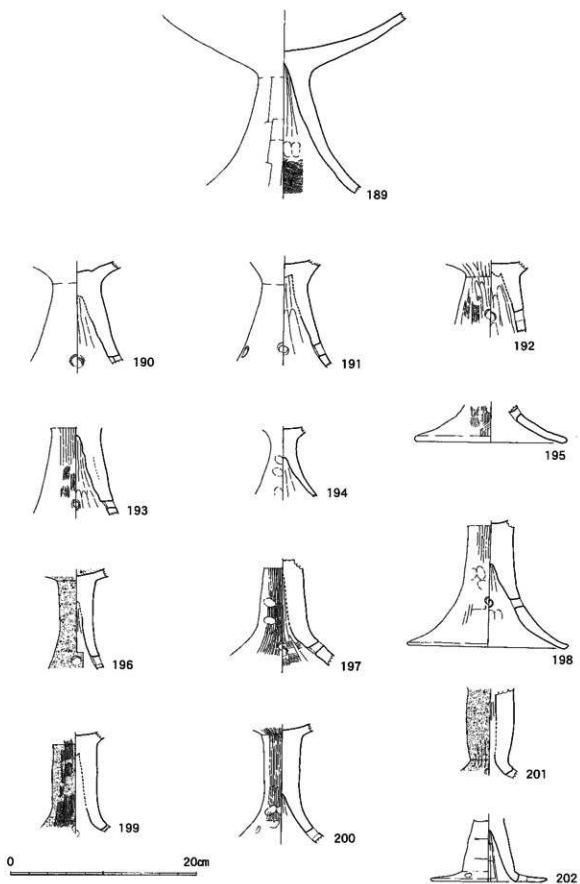
第21図 安国寺遺跡 その他の出土土器(1)



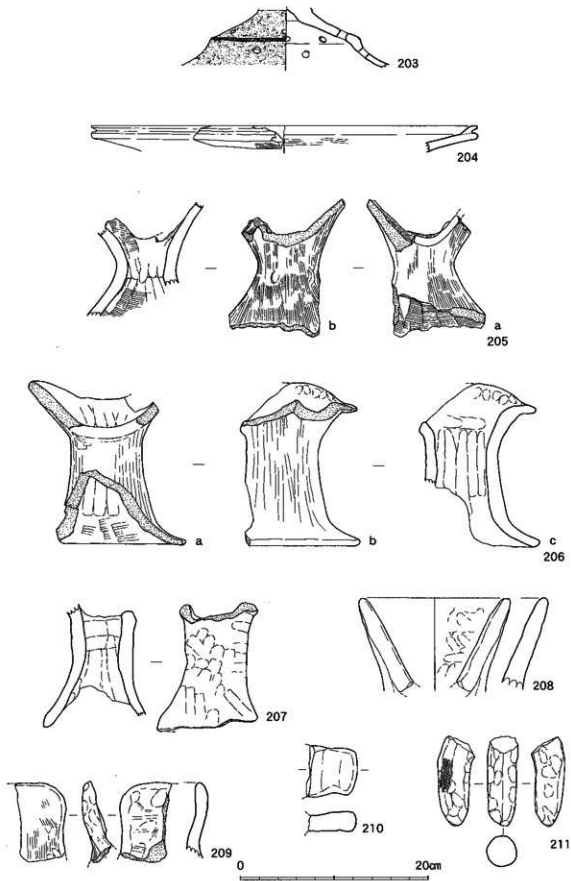
第22図 安国寺遺跡 その他の出土土器(2)



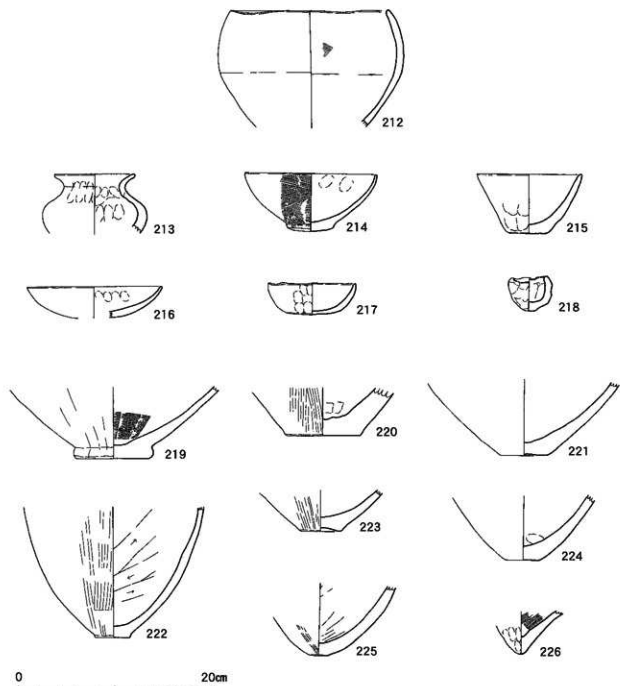
第23図 安国寺遺跡 その他の出土土器(3)



第24図 安国寺遺跡 その他の出土土器(4)



第25図 安国寺遺跡 その他の出土土器(5)



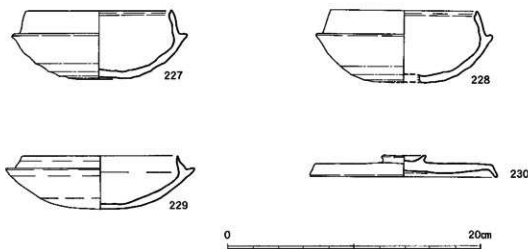
第26図 安国寺遺跡 その他の出土土器(6)

あるが、えぐりを有することが分かる。210は板状のもの、また211は棒状のもので、器台の背後などに付されたものか。

212から217は鉢である。212は口径16.2cmを測るもので、胴部が緩やかに内湾し口縁にいたる。213は小型品で口径8.3cmをはかる。偏球形気味の胴部から口縁が外方に開く。214、215は器高の深いタイプで、いずれも平底を呈する。216、217は口径に比し器高の低いもので、いずれも丸底あるいはそれにちかい底部形態をなす。

218は手づくねの小型品である。

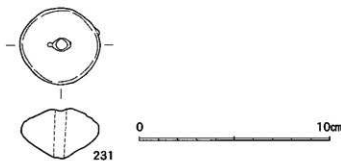
219から226は壺や甕の底部である。明確な平底から丸底を呈するものまでみられるが、概して丸底を呈するものが少ないようである。



第27図 安国寺遺跡 その他の出土土器(7)

以上の弥生時代土器のほかには須恵器の出土もみた(第27図)。これらの出土は全体的にみて極めて少量である。227と228は坏身で、両者は並べられたように出土した。いずれも一部を欠くものの完形にちかい形状を呈する。両者は色調、胎上、形態が極めて類似している。色調は白灰色を呈し、胎土には1、2mmの砂粒を含む。227の法量は口径11.6cm、高さ5.4cmを測るもので、口縁立ち上がり部はやや内傾気味である。口縁端部は内傾し、わずかに段状をなす。体部から底部にかけては丸く作られ、体部の半分ちかくまで回転ヘラ削りが施される。228は口径11.6cm、高さ5.7cmを測る。口縁立ち上がり部はやや内傾気味に立ち、口縁端部は内傾しわずかに段状をなしている。体部から底部にかけては丸味をもち、体部の半分ちかくまで回転ヘラ削りがみられる。229も坏身で、口径12.4cm、高さ4.2cmを測る。口縁立ち上がり部は、短く内傾する。口縁端部は尖り気味である。底部は丸味をもち、底部から体部に向け回転ヘラケズリが施されている。しかし、ナデなどがはいり回転ヘラケズリの痕跡は明確ではない。230は蓋で口径14.8cmを測る。体部は偏平で、丸いつまみが付される。また、端部は短く折れる。

このほか土製品の出土もあった(第28図)。231は紡錘車である。径は4.0から4.2cmを測るもので、中央部は厚く作られる。中央部の厚みは、2.1cmである。また、中心に径6mmの穿孔が施される。色調は灰色あるいは淡橙褐色を呈し、全体がユビナデなどによる調整が行われている。



第28図 安国寺遺跡 土製品

(2)石器

溝や土壌などの遺構に加え、遺構検出作業中に石器が出土した。

剥片石器は2点のみである(第29図)。232は安山岩製の石鏃である。全体としてやや幅広の二等辺三角形を呈し、基部にはえぐりがはいる。表裏面とも比較的粗い剥離で仕上げられている。長さ3.05cm、幅2.20cm、厚さ0.50cm、重量2.70gである。233は姫島産黒曜石製の石鏃である。全体として正三角形形状を呈するが、両側辺が外湾している。基部はわずかに凹み気味である。やはり表裏面とも比較的粗い剥離で仕上げられており、一部には自然面を残す。長さ3.05cm、幅2.60cm、厚さ0.85cm、重量4.30gである。以上のほかに、姫島産黒曜石や安山岩の剥片などが出土した。

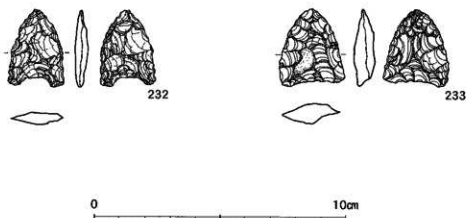
次に紹介するのは蔽石、凹石、磨石などである(第30図)。いずれも河原石である円礫を利用したものである。

234は蔽石である。径8.5cmから10.0cmの円礫を用いており、上面に1ヶ所と側面に1ヶ所の蔽打痕が残る。2ヶ所の蔽打痕ともそれほど顕著なものではない。

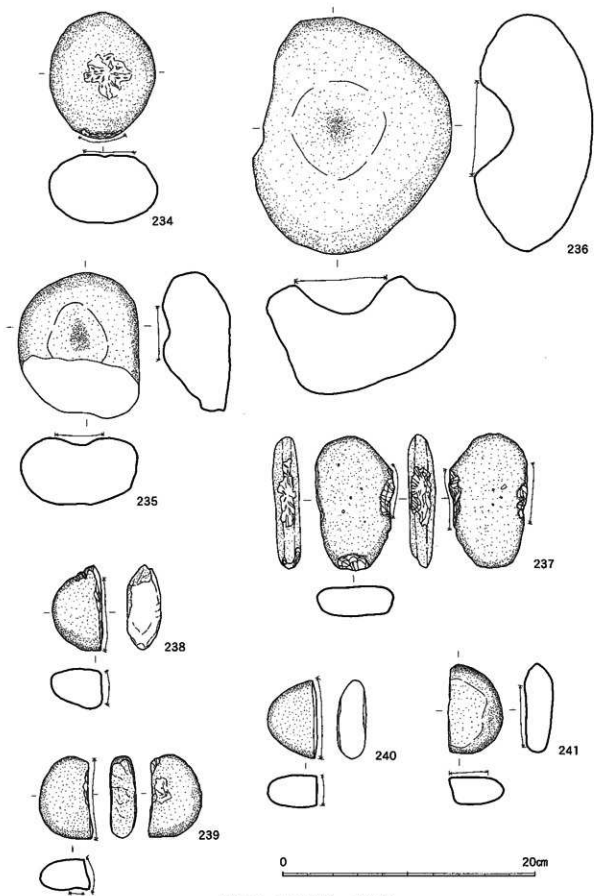
235は凹石であるが、一部を欠損している。径9.6cmから11.0cmの円礫を利用しており、上面に1ヶ所の凹みがみられる。236も凹石であるが、235に比べてかなり大型である。径は15.0cmから18.6cmを測り、厚さも最大部分で8.5cmに達する。上面に径7.0cmから8.0cmの著しく凹んだ部分があり、その深さは2.6cmにも及ぶ。

237は石錘である。比較的扁平で、長細い円礫を使用している。短軸上の両側辺および長軸上の側辺1ヶ所に蔽打によりわずかにえぐりをいれる。長軸の長さ10.6cm、短軸の長さ6.0cmである。

238から241は磨石である。238は現状で長さ6.8cm、幅3.9cm、厚さ3.0cmを測る。円形の円礫を半折したのち、切断面を磨り面として利用している。磨り面は平坦になるほど顕著に磨れている。また、縁辺に2条の溝状の刻み込みがみられる。239は現状で長さ6.6cm、幅3.9cm、厚さ2.2cmを測る。やはり、円礫を半折したものであるが、切断面は磨り面として利用されていない。切断面は打ち欠きの状態のままに残されており、磨石として未使用のものであると考えられる。240は現状で長さ6.1cm、幅4.0cm、厚さ2.4cmを測る。円形の円礫を半折したのちに、切断面を磨り面として利用している。磨り面は顕著に磨られており、平坦になっている。241は、現状で長さ6.9cm、幅4.3cm、厚さ2.2cmを測る。やはり、円礫を半折したものであるが、切断面は磨り面として利用されていない。しかし、片面のみ磨り面として利用されているのが確認されている。以上のような形態の磨石については、これまであまり類例がなく、安国寺遺跡のみ確認されている。円礫の切断面のみ意識的に磨られていることから、何か限られた使用状況が想定される。



第29図 安国寺遺跡 石器(1)



第30图 安国寺遺跡 石罨(2)

第4章 まとめ

今回の調査区(第2図)は、大溝と称される底湿地にU字状に囲まれた住居部分(鏡山・賀川等の調査時に第一住居跡とされた地区)の北側にあたる。ここは田深川に近い部分で、調査区の設定された部分は現状で堤防にあたる。この地区についても、これまで調査区が設けられており、鏡山・賀川等の調査時には第二住居跡とされた。遺構は現在の堤防を越え(鏡山・賀川等の調査時には、現在の堤防は築かれていなかった)、田深川のなかまで及んでいたようである。従って、今回は鏡山・賀川等の調査時に第二住居跡とされた部分に調査区を設定したことになる。しかし、鏡山・賀川等の調査や昭和60年以降の国東町教育委員会の調査が、第一住居跡及びこれを囲む大溝の性格や広がりには主眼をおいているため、第二住居跡とされた部分の内容についてはあまり明らかにされていなかった。よって今回の調査では、第1に第二住居跡とされた部分の实体を少しでも明らかにする。第2に第一住居跡を囲む大溝が北側の田深川方向に続くように想定されているが、それがどのようなものか。以上の課題をもち、小面積ではあるが調査を実施した。

調査区の設定された地区は安定した自然堤防で、田深川に沿い東西にのびるものと推定される。むしろ地形的には、第一住居跡よりも安定した状況であったように思われる。この自然堤防は、現在田深川による侵食が進んでいるが、弥生時代には田深川本流が現在よりも北に位置し、自然堤防も北に広がっていたものと考えられる。検出された遺構は、溝、土壇、壺棺などである。溝については溝1、溝2が重複した位置で、東西方向に確認された。溝1は溝2を切っており、埋没した時期は弥生時代後期終末以降に位置づけられる。溝については鏡山・賀川等の調査時にも、現在の田深川河川敷内にまでおよぼ何条かが確認されている。このなかには、溝1、溝2と平行するように東西方向に長くのびるものや南北方向のものもある。しかし、今回検出した溝との関係は明確にできなかった。溝1、溝2の延長と思われるものは、昭和62年度調査の第8トレンチ(第2図)で確認されている。第8トレンチの溝は幅約2mで、東西方向に走るものである。第8トレンチは今回の調査区の約50m西方にあり、溝1、溝2の延長であれば、田深川と平行するように数十mにわたり続くことになる。この溝の性格については、にわかに断じたいが、田深川沿いに発達した自然堤防上の集落部分を囲む施設であった可能性をもつもので、鏡山・賀川等の調査時にも同様な溝が検出されていることを考えれば、数度にわたりあるときはや場所を変え掘り直されたものであろう。鏡山・賀川等により調査された第一住居跡では、大溝に沿うように5基の壺棺等の小児棺が確認されている。このような小児棺が住居地の縁辺部に設けられるということであれば、今回調査区でも壺棺が溝1、溝2のすぐ北側で検出されており、溝1、溝2が住居地の縁辺に位置し住居地を囲む施設であったこともうなづける。

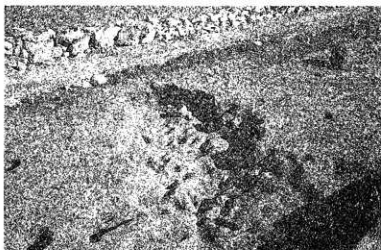
このほか土壇が確認されている。このうち土壇2は調査区外に及ぶ大型のもので、弥生時代の一般的な遺跡では類例がないものである。検出面からの落ち層は緩やかで、黄色粘土層、白色粘土層を過ぎ、円礫混じりの層にいたり床面を形成する。今回の調査区は、第一住居跡を囲む大溝が幅を狭めて田深川方向へのびると推定されていた地区にあたる。しかし、想定された方向への延長は確認されなかった。大溝については、これまで確認のための調査区がいくつか設けられているが、灰白色粘土層を緩やかに切り込み礫層の上面を溝底としている。土壇2では木器などを含む層は確認されなかったが、落ち込みや床面の状況が大溝と酷似する。さらなる確認が必要ではあるが、大溝は当初推定されたように幅を狭めてそのまま田深川へ続くのではなく、田深川に沿い形成された自然堤防の縁に沿うよう西方向に向きを変え、幅を広げているのではないかと推定される。土壇2は溝1から切られており、弥生時代後期後半から終末にはおおかた埋没していたようである。大溝が機能した時期は弥生時代後期後半から終末に比定されており、その埋没下限は布留式古段階まで及んでいたとされている。今回の土壇2とは微妙に時期が異なるかもしれないが、地点が大きく離れることから埋没に時間差があったとも考えられる。



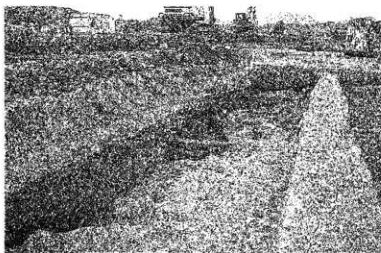
安国寺遺跡調査区全景（東から）



安国寺遺跡調査区全景（西から）



安国寺遺跡土城 1



安国寺遺跡土塼 2



安国寺遺跡土塼 2 と溝 1



安国寺遺跡壘棺

報告書抄録

| フリガナ | アンコクジイセキ | | | | | | | |
|--------|---|------|------------|-----------------------------|--------------|---------------------------|-------------|------|
| 書名 | 安国寺遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | 田深川壑の国ふれあい川づくり事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 大分県文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第119輯 | | | | | | | |
| 編著者名 | 後藤一重 | | | | | | | |
| 編集機関 | 大分県教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒870-8503 大分県大分市府内町3丁目10番1号 〒870-1113 大分県大分市大字中判田字ビワノ門1977番地 大分県文化財文化資料室 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2001年3月30日 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 〇' 〇" | 東経 〇' 〇" | 調査期間 | 調査面積 (㎡) | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 安国寺遺跡 | 東国東郡国東町 大字安国寺 | | 新発見 | 33° 33' 15" | 131° 43' 10" | 1999.11.29~ 1999.12.20 | 約200㎡ | 河川改修 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | | 特記事項 | |
| 安国寺遺跡 | | 弥生時代 | 溝2、土壇2、坪棺1 | 弥生時代後期後半から終末の土器 磨石、凹石、蔽石 | | | | |
| | | 古墳時代 | | 須恵器 | | | | |

大分県文化財調査報告書第119輯

安国寺遺跡

田深川豊の国ふれあい川づくり事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年3月30日

大分県教育委員会

〒870-8503 大分市府内町3丁目10番1号
☎097-536-1111

印刷 別府印刷株式会社
(〒874-0919 別府市石垣東10丁目8-4)
TEL.0977-21-1818 FAX.0977-21-1819